

# 京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究

## 概要書

山岡華菜子

## 1. 本研究の目的

本研究は、京阪式アクセントの諸地域におけるアクセント変化の実態を明らかにし、それを史的変遷の上に位置づけることを目的とするものである。

京阪式アクセントについての研究は、改めて述べるまでもなくアクセント研究の中心をなしてきた分野である。それというのも、一つには京阪式アクセント地域の中心をなす京都アクセントが、種々の文献からその古い姿をうかがい知ることのできるものであるからで、そこから現代に至るまでの変遷を論じた先行研究は数多く存在する。しかしながら、京阪式アクセントの諸地域に範囲を広げてみると、その中にはこれまであまり注目されてこなかった地域が存在し、また、それほど取り上げられていないアクセント変化が観察される。本研究では、そのような地域のアクセントについて、筆者が得た調査結果を用いながら、その実態を明らかにすることを試みる。そして、それによってアクセント史上に残された空白を埋めることを目的とする。

## 2. 本研究の構成

本研究は、本論である第1章から第3章に、序章と終章を付した全5章から成る。本研究の目次は以下のとおりである。

### 【目次】

#### 序章 研究対象と京都アクセント

1. アクセントについて
2. 京阪式アクセントの諸地域と調査地域
3. 京都アクセント

#### 第一章 名詞のアクセント

##### 第一節 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 調査結果
4. 変化傾向の違い
5. おわりに

##### 第二節 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 全体の傾向
4. 語による傾向の違い
5. 変化の方向とその理由
6. おわりに

## 第二章 動詞活用形のアクセント

### 第一節 一段動詞の五段化傾向とアクセント

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 五段化の程度と要因
4. アクセントの類別と五段化
5. おわりに

### 第二節 二拍および三拍動詞の禁止形アクセント

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 調査結果
4. 変化の時期とその原因
5. おわりに

### 第三節 三拍動詞第2類のアクセント変化

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 調査結果
4. 変化の原理
5. おわりに

## 第三章 形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント

### 第一節 三拍形容詞のアクセント変化

1. はじめに
2. 使用するデータについて
3. 調査結果
4. 変化の道筋と要因について
5. おわりに

### 第二節 付属語「らしい」のアクセント

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査結果
4. 地域差とアクセントの変遷
5. おわりに

### 第三節 付属語「たい」のアクセント

1. はじめに
2. 先行研究
3. 京阪式アクセント地域における調査結果

4. 〈タイ〉と前接語との関係
5. 「たい」のアクセント
6. おわりに

#### 終章 京阪式アクセントの展開

1. はじめに
2. それぞれにみられるアクセント変化
3. 京都アクセントにおける変化
4. 地域による進行速度の違い
5. 変化の方向
6. 一段動詞の五段化と付属語アクセント
7. おわりに

### 3. 研究対象について

#### 3.1 アクセントの定義と表記

本研究においては、金田一春彦（1974：5）や上野和昭（2011：3）などの定義に従い、アクセントとは「一つひとつの語について決まっている高低の配置」であるという立場をとる。そして、語の中で相対的に高く発音される拍をH、低く発音される拍をL、下降拍をF、上昇拍をRで書き表し、以降では先行研究におけるアクセントの記述も、支障のないかぎり本研究で使用する表記に書き改めることとする。

この、H・L・F・Rという表記は、基本的に「単語を構成するそれぞれの拍が高か低、あるいは上昇か下降といういずれかの音調を担う」という考えによるものである。アクセントの捉え方には、このほかの見方（「方向観」と呼ばれるものなど）も存在するが、筆者はそれらについて否定的な見方をしているわけではない。しかしながら、本研究の目的を果たすため、時代（世代）ごとにアクセントの比較をおこなうことを重視して、史的研究において用いられることの多いH・L・F・Rでアクセントを表記することにする。

#### 3.2 調査地域

本研究では兵庫県淡路市の岩屋・富島・郡家、洲本市の洲本・由良、南あわじ市の津井・福良、兵庫県明石市（以下、「明石」と呼ぶ）、徳島県鳴門市鳴門町（以下、「鳴門」と呼ぶ）、大阪府岸和田市春木、大阪府岬町深日、和歌山県和歌山市加太、和歌山県和歌山市恋野、高知県高知市（以下、「高知」と呼ぶ）という14の地域を主に取り上げて、それぞれのアクセントについて論じる。

調査対象者を探す際には、1. その地域で言語形成期を過ごしたこと、2. 現在も同じ地域に居住するかごく近い地域に居住すること、3. 地域内部との関わりが深い職についていること、4. 男女は問わないことを条件とした。そして、年齢によって若年層（20代～30代）、中年層（40代～50代）、高年層（60代以上）の三つにわけ、それぞれ最低1人、可能であ

れば2人以上に対して調査をおこなった。2人以上を調査する場合には、異なる年代（20代1人と30代1人など）になるように配慮した。

ただし、各論で必ずしも上記すべての地域・調査対象者のアクセントについて取り上げるわけではなく、調査した中でアクセント変化に注目すべき点がみられた所を中心に取り上げる。

### 3.3 調査語彙

調査語彙は、一拍から三拍の名詞（血、風、力など）、二拍・三拍の動詞（置く、上がるなど）、二拍から四拍の形容詞（濃い、赤い、悲しいなど）と、付属語（らしい、たい、くらいなど）、複合名詞（新年度、夏祭りなど）、複合動詞（思い出す、起き上がるなど）とした。

本研究では、このうち地域差や世代差が特にみられ、なおかつアクセント史を論じる際に問題となる二拍名詞・三拍名詞、二拍動詞・三拍動詞、三拍形容詞、形容詞型活用の助動詞におけるアクセント変化を取り上げることとした。それぞれの論じた内容について、その概要を次にまとめる。

## 4. 本論の概要

### 4.1 第1章 名詞のアクセント

#### 4.1.1 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向

第1章の第1節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）と明石、鳴門における二拍名詞第4類と第5類の合同傾向について述べた。その中で、とくに〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類+高起式〉〈第5類+低起式〉のアクセントに注目し、それぞれの変化の様相を明らかにした。そして、先行研究にあげられている合同の道筋、すなわち「〈第5類+低起式〉>〈第5類単独形〉>〈第5類+高起式〉>〈第4類+助詞〉」の順で変化するという考えをもとに、地域ごとの比較をおこない、その変化過程について考察をおこなった。そうすると、次のような六つの変化過程を示すことがわかった。

- A1. 〈第5類+低起式〉>〈第5類単独形〉>〈第5類+高起式〉>〈第4類+助詞〉
- A2. 〈第5類+低起式〉>〈第5類単独形〉>〈第4類+助詞〉>〈第5類+高起式〉
- A3. 〈第5類+低起式〉>〈第4類+助詞〉>〈第5類単独形〉>〈第5類+高起式〉
- B1. 〈第5類+低起式〉>〈第5類+高起式〉>〈第5類単独形〉>〈第4類+助詞〉
- B2. 〈第5類+低起式〉>〈第5類+高起式〉>〈第4類+助詞〉>〈第5類単独形〉
- C. 〈第5類+高起式〉>〈第5類+低起式〉>〈第5類単独形〉>〈第4類+助詞〉

この理由については必ずしも明確でないが、先行研究における記述と合わせて、中央部

から伝わって変化が生じた可能性がある」と述べた。ただし、鳴門のように一部の地域においては両類の変化の時期が連続しているとは言いがたい様相であった点には注意が必要であるとした。

#### 4.1.2 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化

つづく第1章第2節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（岸和田市春木・岬町深日）、和歌山県北部（和歌山市加太・橋本市恋野）、高知における三拍名詞第2類と第4類のアクセント変化について取り上げた。これらの語のアクセントがHLLやLHLのほか、HHHやLLHに変化する場合があること、その変化には地域差のあらわれる場合があることを指摘した。また、地域や世代のほかに、たとえば、ハサミやカガミなどにはLHLが多く、イケスやクルミなどにはHHHが多いなど、語によって変化する先のアクセントが異なることを述べた。その理由については明確に述べるができなかったが、様々な要素が複合的にはたらいっていることを考慮する必要があると指摘した。その様々な要素というのは、たとえば〈型の統合〉（HLLへの変化）や、語を構成する子音と母音の影響（LHLへの変化）、「語の馴染み度」（低い場合、HHHへの変化）などである。

また、第2類・第4類のほか、従来HLLで発音されていた第3類や第5類の語にもHHHやLLHへの変化のみられる場合があることから、全体として典型的な高起式であるHHHになろうとする力がはたらいっている可能性を指摘した。

### 4.2 第2章 動詞活用形のアクセント

#### 4.2.1 一段動詞の五段化傾向とアクセント

第2章第1節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）における一段動詞の五段化について述べた。まずは筆者のおこなった調査で得られた結果を概観し、五段化傾向に地域差のあることを確認した。そして、そのうち五段化傾向の弱い地域について、先行研究の記述と照らし合わせながらその要因を考察した。すなわち、否定形・命令形の語形が「オキン（起きない）」「オキロ（起きろ）」ではないことによって五段化が生じない地域があること（深日、鳴門）、また、かつて否定形や使役形は五段化していたが、「オキラン（起きない）」が「オキヤン」に、「オキラス（起きさせる）」が「オキヤス」となり、五段化の要因となる語形が存在しなくなったために現在五段化傾向がみられない地域があること（加太）を述べた。

さらに、五段化と近い時期に生じたと考えられる三拍動詞第2類のアクセント変化との関係についても考察をおこなった。そして、五段化がアクセントの式に影響を与えることはないことを確認した上で、五段化がすべての活用形に生じたとしても、三拍動詞第2類のアクセント変化が妨げられることはなかったと結論づけた。つまり、このような文法上

の現象がアクセント変化には影響を及ぼさないことを明らかにした。

#### 4.2.2 二拍および三拍動詞の禁止形アクセント

つづいて、第2章第2節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）、高知における動詞の禁止形（終止形+助詞ナ）のアクセントについて述べた。そして、以下の六つの点について指摘した。

- (1) 禁止形アクセントの変化は〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉へ置き換わることによって生じたものであるが、地域によって現在でもその様相には差があり、大きく「変化している地域」と「変化していない地域」とに分けることができる。
- (2) 「変化している地域」のうち、中年層と若年層を比べた時、若年層に〈古い終止形〉を留めた型と同じアクセントのあらわれる地域が存在する。
- (3) 「変化している地域」であっても、禁止形アクセントの変化の時期は、それぞれの地域によって異なることがある。
- (4) 三拍動詞第2類一段活用の禁止形アクセントの変化が、他より少しばかり早く生じる傾向がみられ、それには三拍動詞第2類のアクセント変化が関係している可能性がある。
- (5) 禁止形アクセントの変化の原因として、近世後期に生じた連用命令禁止形（連用形+助詞ナ、起きなLHLなど）のアクセントの影響が考えられる。
- (6) 品詞にかかわらずみられる〈型の統合〉が、「変化していない地域」と(2)の地域が存在する理由の一つであると考えられる。

#### 4.2.3 三拍動詞第2類のアクセント変化

第2章第3節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）、高知における三拍動詞第2類のアクセント変化について、調査結果を報告し、それをもとにアクセント変化の原理を検討した。その中で、先行研究で言われているようなH2型のH1型への統合がさほど顕著にみられないことや、「接続連用形」が無核化と第2類のアクセント変化が必ずしも連続していないことを述べた。これをまとめると、次のようになる。

- A. 変化した後の姿に地域ごとの違いはほとんどなく、同一のアクセントとなる。
- B. 変化には同じ原理が働いている。
- C. H2型からH1型への統合は、それほど顕著にみられない：変化のきっかけが〈型の統合〉だけにあるとは言いにくい（中井2012の見解と一致する）。
- D. 付属語接続の連用形については、これが無核化してから実際に第2類の変化が生じるまでには時間差が存在し、複合動詞前部の連用形に生じるアクセント変化は、第2類の変化と近い時期に生じている。すなわち、これによって変化が生じたとまでは言

えないのではないか。

そして、これらの点をふまえたうえで、三拍動詞第2類のアクセント変化について、そのきっかけになると考えられるものとして、次のように提示した。

- E. 否定形のアクセントは、後ろから三拍目で下がる(-3型)という点で、第2類五段活用と一段活用とはもともと一致していた。
- F. 第2類五段活用の意志形は、一時的にHHL(HHLL)とHLL(HLLL)との間(H2型とH1型)でゆれが生じ、それによって第2類一段活用と混同した。また、これにより、過去形と命令形(と「接続連用形」)以外のアクセント型がほとんど同一になろうとした。
- G. 第2類五段活用の過去形と第1類五段活用の過去形とが、HLLL(H1型)とHHLL(-3型)との間で揺れ始めた。
- H. 意志形の変化の前に「接続連用形」が無核化していた、あるいは無核化しつつあったため、第2類の五段活用と第1類、第2類の一段活用と第3類には共通するところが多くなっていた。
- I. 第2類五段活用と一段活用とは、過去形・命令形・「接続連用形」のアクセントが大きく異なったため、同じ方向へは動くことができなかった。

#### 4.3 第3章 形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント

##### 4.3.1 三拍形容詞のアクセント変化

第3章第1節では、淡路島(岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良)、明石、鳴門、大阪府南部(春木・深日)、和歌山県北部(加太・恋野)における三拍形容詞のアクセント変化について取り上げた。

三拍形容詞の各活用形のうち、ここではとくに終止形と連用形(カッタ形・テ形・ナル形)のアクセントを整理した。そうすると、従来言われている第1類が第2類に合同するという変化のほか、連用形においてL-型(例:赤かったLHLLLなど)からH-型(例:赤かったHHLLLなど)になるという変化が生じていることが明らかとなった。本研究ではその理由について、四拍形容詞の終止形アクセントがHHHLからHHLLに変わることが関連すると考え、すなわちそれによって三拍形容詞と四拍形容詞がいずれも高く始まり、終止形が-3型・カッタ形が-4型・テ形が-2型・ナル形がH0型というきわめて整った形になることを指摘した。さらに、カッタ形・テ形・ナル形におけるH-型とL-型のあられ方の違いについても検討を加え、カッタ形のL-型は不安定なためにH-型への変化が速く進行するが、テ形とナル形はそうでないために変化が遅いのだと述べた。

##### 4.3.2 付属語「らしい」のアクセント

つづく第3章第2節では、深日、岩屋・福良、高知における調査の結果から、形容詞型の活用をもつ助動詞〈ラシイ〉のアクセントについて述べた。〈ラシイ〉と前接の語のA

アクセントにはさまざまな傾向が認められたが、これは現代語において「推定」の意味をあらわす助動詞〈ラシイ〉が、もともとは形容詞を作る接尾語であった〈ラシイ〉の転成によって成立したと関係するという点を指摘した。そして、接尾語〈ラシイ〉と区別するために、助動詞〈ラシイ〉のアクセントが変化したのだと指摘した。

また、「らしい」のアクセントには HLL のような-3 型と HHL・LHL のような-2 型があらわれたが、そのあらわれ方には形容詞の終止形アクセントと関連性が存することも述べた。すなわち、「悲しい、嬉しい」などのような四拍形容詞が HHHH で発音される地域や年齢層においては「らしい」にも HHL (-2 型) があらわれる傾向にあるということであるが、深日の調査結果から、「らしい」のアクセントには形容詞のアクセントよりも-2 型があらわれやすいと考えた。

#### 4.3.3 付属語「たい」のアクセント

第3章第3節では、深日、岩屋・福良、高知における調査の結果から、同じく形容詞型の活用をもつ助動詞〈タイ〉のアクセントについて述べた。〈ラシイ〉と同様、〈タイ〉と前接語のアクセントにもいくつかの傾向があらわれた。その理由について、近世期の京都・大坂アクセントを反映するとされる資料の用例を使い、そこにあらわれる〈タイ〉と前接語のアクセントが中井幸比古(2002ab)などと一致することを確認した上で、南北朝期に起こったとされる「体系変化」が関係するという可能性を指摘した。

また、「たい」のアクセントに HL と LL の2種があらわれ地域差をなすことについては、室町期から江戸期に起こった形容詞アクセント体系の変化との関連性から説明を試みた。形容詞アクセントが H3 型から H2 型、また H2 型から H1 型へ統合されることによって、京都では「たい」のアクセントが LL になったのだと捉えることができ、その一方で、統合が完了していない地域においては「たい」に HL があらわれるのだとした。ただし、時期が完全に一致するわけではない点については注意が必要であり、「らしい」と合わせて考えると、これらの付属語における変化の進行は自立語における変化の進行よりも遅いということを指摘した。

### 5. 京阪式アクセントの展開

第1章から第3章では、二拍名詞・三拍名詞、二拍動詞・三拍動詞、三拍形容詞、形容詞型活用の助動詞におけるアクセント変化について個別的に述べてきた。

終章では、これまでの内容をもとに「地域差」という観点と「アクセント型の統合」、「アクセント体系」という観点から京阪式アクセントの展開について考察をおこなった。具体的には、まず第2項で第1章から第3章までに述べた内容をまとめ、第3項で京都アクセントの変化について触れた。それをふまえて、第4項では「地域差」について取り上げ、すべてにおいて古いアクセントを残す地域がもはや存在しないこと、中央部からの地理的な距離が変化の遅速に影響を及ぼすことはあってもそれがすべてではないこと、品詞

や形（活用形）によって変化の進行度合が異なり、そこに地域差があらわれることなどを述べた。

つづく第5項では、アクセント体系は全体的に整然とした形になろうとしているのだということを改めて確認した。そして、その整然とした体系にまとまろうとする中で、「アクセント型の統合」や「体系からの力」がはたらくのだということを書いた。ただし、「アクセント型の統合」の力はアクセント史における「近世」などよりも弱まっており、むしろ「体系からの力」や、三拍名詞アクセントに顕著であった別の型に置き換わろうとする力などが強まる傾向にあり、それによって類の合同が引き起こされるのだということを書いた。また、東京アクセントのような他のアクセント体系との対応関係についても注意が必要であることを確認した。すなわち、これらが現代京阪式アクセントのもつ特徴であるということになる。

また、第6項では文法に関わる事柄についてもふれ、一段動詞の五段化のような文法上の現象がアクセントとは関係の薄い変化であること、付属語〈ラシイ〉〈タイ〉のアクセント変化には文法上の問題が関わっており、名詞・動詞・形容詞にみられるアクセント変化とは異なる点がみられることを改めて確認した。

本研究に残された課題は多いが、現代の京阪式アクセントについて、そこにあらわれたアクセントの変化を整理しアクセント史の上に位置づけるという本研究の目的はある程度、達せられたといえよう。